

「問題の外在化」を通じた発達障害児を持つ母親の語りの変容

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
茅根 未央

本研究は、発達障害やその疑いのある子どもを持つ母親への支援によって、子どもの行動や対処に関する母親の語りがどのように変容していくのかを捉えることを目的とした。そこで、問題や病気を擬人化して当事者と話し合わせる「問題の外在化」という技法を用いた。発達障害やその疑いのある小学生の母親4名を対象に、全6回の「問題の外在化」プログラム及び、全セッション終了後の個別インタビューを実施した。分析では各参加者の経験を理解する上で重要なエピソードをピックアップし、事例別のストーリーラインを作成した。その上で、総合考察では外在化が成功した事例と失敗した事例を検討した。まず、外在化が成功した事例では、「母親自身の態度を省みる」、「過去の親子関係を振り返る」、「問題と距離を置く」、「親子で擬人化した問題のイメージを共有する」の4点が共通していた。一方、外在化が失敗した事例では、「扱う問題の難しさ」、「擬人化した問題のイメージが共有できない」、「子どもの視点に立つことの難しさ」の3点が共通していた。さらに、外在化の成功・失敗に関わらず、ほとんどの母親に「子どもの話に耳を傾けるようになる」、「親子関係を客観的に見るようになる」、「子どもと一緒に問題を考えるようになる」といった語りの変容が見られた。以上の結果から、「問題の外在化」による支援は、母親に様々な気づきを与えることが示された。